

こわい人

2020.9.7

私は教員になってから「こわい人」に出会っている。その人は私と同じ中学の国語教師だった。そのこわい人とは、同じ学校に勤めたことはない。私との接点はというと、私が授業者、その方が指導助言者、研究団体の部長と部員、教育冊子の編集委員長と編集委員などであった。

まずは出会いが鮮烈であった。2校目の中学校時代だった。学校訪問の際に授業を見ていただき、指導助言をいただいた。あの当時、この学校の国語教師は私を含めて6名いた。私だけではなく、6名全員が、俗な言葉を使うと、それこそけちょんけちょんに言われた。

最初は、「確かにそうだな」と謙虚に聞いていた。だが、その言われように、だんだんと腹が立ってきて「なにをそこまで言うことはないのではないのでしょうか」「あなたは国語教師なのですから、もう少し言葉の使い方に気をつけた方がいいのではないですか」と心の中で発言している自分がいた。

散々な言われようで、頭にきたまま国語科の事後研究会は終了した。私は、「今に見ている。今度はすばらしい授業をやってみせるから」と固く心に誓ったのである。この散々な学校訪問が後期の10月で、次年度は前期と決まっていた。リベンジのための期間は、約半年しかない。私は、今まで以上に勉強した。本も読んだ。心の中にはいつも「捲土重来」の4文字があった。

次の年になり、学校訪問が前期の5月と決まった。私は早めに授業構想に取りかかり、学習指導案を何度も練り直した。そして、学校訪問実施日の2週間ほど前になり、実施要項が配布された。そこには、国語の指導助言者として、私のリベンジの相手のご氏名はなかった。「あれっ」拍子抜けの一言である。

それでも、自分なりに努力を重ね、学校訪問の授業を行った。後で思ったことであるが、あの方は、若い我々に期待を込めて厳しく言ってくださった。確かに言われても仕方がないレベルの授業だったということである。半年後の指導助言はいただけなかったが、かなりの刺激をいただき、半年間努力できたことは確かであった。素直に反応し、熱く燃えたあの頃の自分が懐かしく思われる。厳しく言ってくださったあの方には、今では感謝している。

すると、その方は校長先生になり、研究団体の部長として再び私の前に現れた。あの頃、私は研究推進委員などを務め、夏の研究協議会などでよく実践発表をしていた。〇〇市カリキュラム委員や〇〇問題作成委員など、いくつかの仕事でお世話になっていた。部長であるその方に、宿題である原稿を提出するときなどは、いわゆるびびっている状態であった。いつも「何を言われるのか。何か聞かれたらどうしよう。答えられなかったらどうしよう」という思いが頭の中を渦巻いていた。

そんなびびっている状態の中、忘れもしない平成14年の夏のことであった。この年は、私がイタリア、ローマ日本人学校から日本に戻ってきて中学校に勤務しているときであった。確か〇〇市カリキュラム委員の仕事だったと思うが、夏休み前に約20ページにわたる実践提案を原稿として作成するという宿題が出された。〇〇市内の先生方に「こんな実践をされるといいのではないですか」という提案をするというものであった。正直あの頃の私は「私には無理だ。どうしよう」という思いしかなかった。何が無理かということ、原稿を書くことはできたとしても、あの方の高いハードルを越せることができるとは思えなかったのである。

(次号に続く)